



チュニジア：「犯行声明」の発表

18日～20日にかけて、インターネット上でチュニスのバルドー博物館襲撃事件についての「犯行声明」とされる文書と音声が出回った。各々の概要は以下の通り。

発表者	「イスラーム国」	「チュニジアのアンサール・シャリーア」
発表日	日本時間3月19日深夜	日本時間3月18日午前
形態	音声	文書
概要	<ul style="list-style-type: none"> ● カリフ国の騎士のうち突撃要員2名が出撃した。「アブー・ザカリヤー・トゥーニシー」と「アブー・アナス・トゥーニシー」である。両名はマシンガンと手榴弾で武装し、バルドー博物館を目標として出撃した。 ● 「バヤーン・ラジオ」のサイトに掲載。 ● 製作者は明示されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「普通の日」ーバルドーでの祝福された作戦についての論評ーと題する。 ● 両名は計画通り議会へ向かったが、・・・両名は議事堂突入作戦を変更し、博物館の中にいる全ての不信仰者と背教警官を殺すことにした。そして、複数のバスの中にいた不信仰者共に手榴弾を投擲し、博物館内に入った。 ● （警察が）作戦に参加した者のうち3名を捕らえたというのほうそである。3名は一般人の見物人である。 ● ヤーシーン・ウバイディー、サービル・ハシュナーウィーをアッラーが受け入れますように。 ● 「イフリーキーヤ・リ・イウラーム」のロゴ入り画像つき。

評価

イスラーム過激派の主要団体が発表する声明類の信憑性は、それらが発表された経路によって強く規定される。これは、かつてイスラーム過激派がインターネット上の掲示板サイトの利用を本格化させた際、虚偽声明や映像・動画の剽窃が相次ぎ、声明や動画を発信する主体自身

が、作品が真正なものであることを立証しなくてはならなくなったこと、掲示板サイトの管理人や閲覧者たちが虚偽や剽窃の疑いのある作品を積極的に排斥したことにより、一部の有力掲示板サイトから信憑性の低い作品を投稿する主体が淘汰されたことなどに由来する。こうした観点から見ると、今般出回った 2 点はいずれも信憑性の高い経路を通じて流布したものであり、各々「イスラーム国」、「アンサール・シャリーア」による作品の可能性は高い。

一方、「作品が本物である」、ということと「その内容が事実である」ということとは別問題である。例えば、「イスラーム国」が発信する声明類は、通常投稿される際のタイトルに製作部門が明記される。映像・音声などがある場合はそのリンクを掲載する本文に製作部門名が記され、そのロゴが貼り付けられる。しかし、今般の音声は投稿のタイトル、本文、そして音声本体にも、この音声がいずれの製作部門の手によるものかを示す情報が含まれていなかった。また、その日一日の「イスラーム国」の戦果を取りまとめて朗読する形式をとる「バヤーン・ラジオ」の普段の音声とも異なる形式で発表された。「アンサール・シャリーア」の文書は、事件発生後比較的短時間のうちに出回ったもので、襲撃の様態を詳細に叙述するなど多くの情報を含んでいる。但し、文書自体は犯行声明と呼ぶにはあまりにも長大で、表題の通り「論評」と呼ぶほうがふさわしいもので、襲撃の様態や実行者についての情報の裏づけとなるような証拠を伴っているわけでもない。

この 2 点で注目すべきところは、襲撃の目標についての描写である。「イスラーム国」の音声は単に「博物館を目指して出撃」と描写しており、襲撃対象が最初から博物館だったと述べていると判断できる。これに対し「アンサール・シャリーア」の文書では「議会に突入するという当初の作戦を変更して博物館へ向かった」と明記されている。すなわち、2 点の「犯行声明」は襲撃の目標についての内容が食い違っており、両方の内容が事実として並立することは考えにくい。以上から、博物館を襲撃した主体やその意図については依然として確たる情報がないといわざるを得ない。どのような主体が襲撃を実行したとしても、「敵方への脅しや自らの主義主張の流布」を目的とするテロ行為として作戦を完結させるためには、証拠を伴う信憑性の高い情報と、攻撃対象などについての整合性のある説明を発信する必要があるだろう。

(イスラーム過激派モニター班)

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

◎各種情報、お問い合わせは中東調査会 HP をご覧下さい。URL : <http://www.meij.or.jp/>